

聖書：第二サムエル記 12章 24～31節

説教：ウリヤの妻によってソロモンが生まれ

1 ダビデとバテ・シェバ

1) ウリヤの妻：最初の子は死ぬ

ダビデは、部下ウリヤの妻、バテ・シェバと一夜をともにします。それから間もなくバテ・シェバが妊娠したとの知らせが届きました。このことが公になることを恐れたダビデは、王としての権力を使ってウリヤを殺してしまいます。邪魔者はいなくなりました。ダビデはだれはばかることなくバテ・シェバを自分の妻に迎えます。

神がこのことを見逃すはずはありません。預言者ナタンを遣わし、ダビデの罪を責め立てます。ダビデは最後に、「私は主に対して罪を犯した」と告白しました。これに対し、ナタンこのように言います。12章13節。「主もまた、あなたの罪を見過ごしてくださった。あなたは死なない。しかし、あなたはこのことによって、主の敵に大いに侮りの心を起こさせたので、あなたに生まれる子は必ず死ぬ。」そのとおりになりました。続く15節。「主は、ウリヤの妻がダビデに産んだ子を打たれたので、そこは病気になる。」ダビデは必死に祈るのですが、子どもは死んでしまいます。それが前回までのあらすじでした。

2) ダビデの妻：ソロモンは祝福される

きょうはまず、バテ・シェバが誰の妻であったのかについて、聖書がどう書き分けているかを見ます。まず15節です。バテ・シェバが最初の子どもを産んだとき、「ウリヤの妻」と紹介されていることに注意してください。ダビデはまだバテ・シェバと結婚してい

なかったからそう呼ばれていたのか。いいえ、すでにダビデはバテ・シェバと正式に結婚しています。それなのに最初の子どもを産んだときは、「ウリヤの妻」となっています（11章27節）。

それが24節ではこうなる。「ダビデは妻バテ・シェバを慰め、彼女のところに入り、彼女と寝た。」ここではダビデの妻となっています。いずれも正式に結婚した後です。けれども呼び方がこのように違っていています。どうして呼び方が変わるのか。そのことが疑問です。

そしてもっと大きな疑問があります。ダビデは欲望を抑えることができなくて、自分の部下の妻を横取りしました。そのことを隠すために、ウリヤを殺しました。後になって罪を告白し、ダビデの罪は赦されはします。そこまではなんとか理解できる。でもわからないことがあります。バテ・シェバから見ると、ダビデは自分の夫を殺した犯人です。ふつう、そんな人と結婚できるのか。当時、未亡人が暮らしていくことは大変なのでダビデは責任をとってバテ・シェバを養うことにした、というのならわかります。でもそれなら、わざわざ結婚しなくてもよいはず。ところがダビデは、バテ・シェバとの結婚関係を続け、ふたりの間にはソロモンが生まれます。そのソロモンが、神に愛されたとも書かれています。いったいどうなっているのでしょうか。バテ・シェバはしたたかな女性で、まんまと玉の輿に乗ったのを喜んでいた。少し意地悪かもしれませんが、そのような可能

性を指摘する方もいます。けれども聖書が問題にしているのはバテ・シェバではなく、あくまでもダビデです。ダビデがなぜバテ・シェバをそのまま妻としていくのか。その意味を考えていきます。

2 ラバとの戦い

1) ダビデはエルサレムにとどまっていた (11章1節)

どこかに答えがあるのかと思いつつ先を読み進むと、26節からいきなり何の関係もなさそうな戦争の話になります。でも聖書は関係のないことは書きません。戦争のことでダビデのことが関係があるから書きます。

そもそもアモン人との戦いはいつ始まったのか。11章1節です。ヨアブがアモン人と戦うために出陣したのですが、ダビデはエルサレムにとどまっていた。そこから一連の事件が始まった。つまりダビデの罪とこの戦争のことはパラレルになっている。最初からそんな流れがあったのです。だからここにアモン人との戦いの話が出て来ても不思議ではない。

2) 主の敵に大いに侮りの心を起こさせた (12章14節)

では戦争のことでダビデの罪がどのような関係があるのか。そのヒントは12章14節にあります。ダビデが罪の告白をした後、神がナタンを通して語ったことばです。「しかし、あなたはこのことによって、主の敵に大いに侮りの心を起こさせたので、あなたに生まれる子は必ず死ぬ。」

主の敵とは誰のことを指すのか。ダビデの罪と、アモン人との戦争がパラレルに語られ

ていると言いました。イスラエルはいまアモン人と戦っている最中です。将軍ヨアブが一生懸命がんばってはいますが、相手が強くて攻め込むことができない、膠着状態が続いています。ということは、主の敵とはアモン人を指すということになりそうです。でも、生まれてくる子どもをアモン人が直接殺す訳ではありませんから、それはどう説明したらよいのでしょうか。

聖書全体で見るなら、主の敵とは、神に逆らうもろもろの力、あるいはイエス・キリストを十字架につけた者たちということができます。突き詰めれば罪ということです。

目の前のことから言えばアモン人を指すけれど、広く捉えれば罪を指す。この二つのことは別々なのではなく、重なっていると考えてみたらどうなるでしょう。

3) ダビデが出陣する (12章29節)

ダビデをイスラエルの王に立てたのは神です。主の敵と戦うためにダビデが召し出されました。それなのに、アモン人との戦争のことはすべて将軍ヨアブにまかせ、自分はひそかに罪の楽しみにふけていました。ダビデは、主の敵と戦わなければならないのに、むしろ自分のほうが主の敵に絡め取られてしまっていたのです。

けれども、ダビデは預言者ナタンを通して、罪を示され、罪を告白し、生まれてきた子どもが死ぬという苦しみを通して、もう一度自分の任務を思い出していきます。主の敵と戦うのはヨアブではなく、自分である。それが主から委ねられた使命であることを自覚し、ダビデはラバに出陣していきます。

3 十字架

1) 悔る人たちの真ん中で死ぬイエス

さて、最初に取り上げた疑問に戻ります。ダビデはなぜバテ・シェバを妻としていくのか。聖書は、過去に起こった出来事を書き連ねた単なる歴史物語ではありません。すべて罪人である私たちの救いを示すために書かれた書物です。このところもそうです。ダビデの身に起きたことは、やがてダビデの子孫として来られるイエス・キリストの姿を現していると考えることができます。

もちろん、主イエス・キリストとダビデがすべて同じだという意味ではありません。違うところも沢山あります。ダビデは罪を犯しましたが、主は罪を犯すことはありません。人としてお生まれになったときから、神のひとり子として聖くあられました。人々は、「おまえが本当に救い主だというのなら、しるしとしての奇蹟を見せてくれ。そうしたら信じるから」と言うのですが、「ヨナのしるしのほかは、しるしは与えられていない」と語って、なにもなさいません。こんな有様でしたから、この方が主の敵である罪と戦っているようにはとうてい見えませんでした。むしろ、自ら進んで私たちの罪を背負っていかれます。その結果、人々からののしられ、さげすまれ、罪人と呼ばれ、十字架につるされていきました。

十字架の周りには、イエスをののしる人たちの声があふれていました。主の敵である罪と戦うために来られた方が、罪人によって侮られました。

主の敵に悔りを起こさせたとき、ダビデに生まれてくる最初の子どもが死ななければなりません。それと同じように、十字架の周りに悔りの声が満ちるとき、神のひとり子が死んでいきます。

2) よみがえり：「ウリヤの妻」から「ダビデの妻へ」

もし死んで終わりだというのなら、主の敵が勝ち誇って終わりです。私たちはこの世で一番哀れな者たちということになります。もちろん、そうではありません。私たちはこの方が死からよみがえられた事を知っています。正直に言えば、心の底から信じているかどうかは怪しいかもしれない。それでも、信じてよいのだと言われています。ダビデも最初よみがえりがわかりません。けれども、自分の罪のために生まれてきた子どもが死ぬという苦しみを通らされ、次第に主のよみがえりを現実のものとして受けとめます。自分は、死んだ子どもを呼び戻すことはできない。でも主が必ずそれをしてくださると信じます。

バテ・シェバが最初「ウリヤの妻」と紹介され、後になってから「ダビデの妻」と紹介される。その変化はどこにあったのか。まさに主のよみがえりのことがきっかけでした。

3) 赦しの大きさ：バテ・シェバを妻として迎える

それにしても、ダビデは自分の犯した罪の重さを自覚しているのでしょうか。悔い改めたかもしれませんが、バテ・シェバと結婚するなど恥知らずだ、と言いたくなります。でも主はそのことを赦します。生まれてくるソロモンを祝福します。怒りが湧いてきても当然だと思います。納得できないかもしれませんが、私たちが怒るほど、主の赦しが大きいとしか言いようがありません。

そしてマタイの福音書1章6節にこう書かれます。「ダビデに、ウリヤの妻によってソロモンが生まれ。」

罪を赦されたダビデは確かに大きな祝福をいただきました。けれども、罪が忘れられたわけではありません。聖書にはダビデの罪がそのまま記されています。主はそのダビデの罪を背負いながらお生まれになりました。罪と戦うために来られたのに、無力となられ、侮られ、死に渡されていきます。それが神の救いの方であったことを覚えます。